

1 医学、社会事業



岡山の医学教育の礎築く

いく た あ たか
生 田 安 宅

(1840 ~ 1902 年)

幕末から明治初期の医者。岡山藩医の家に生まれ、藩学校で漢学を学び、京都時習堂で蘭方を修め、岡山で難波経直（抱節の子）に入門し産科学を修めた。1868年（明治元）に出仕し、'69年に藩主池田章政に従って東京に行った折、大病院（東京医学校）でイギリス流の医学を学んだ。岡山で開業し、藩主章政の侍医も勤めた。また、章政の構想によって若い医学生に西洋医学を学ばせる医学館が設立され、二等教頭となった。

廃藩置県の後、医学館の改組や維持費の縮小が続く中、多くの同僚たちが辞めていったが、安宅たち数人はとどまり、遠近を問わず診療に出かけて得た診療代で医学教育の灯を守った。1873年（明治6）6月、岡山県はその功労を表彰し、11月には新たに岡山県病院として維持費を出すこととなり、治療と医学生の養成がはかれることとなった。安宅は初代の院長となるが、将来性を考えてイギ

リス医学者に学び海軍軍医寮に勤務していた若栗章を院長に招き、診療と医学生養成に携わった。

1879年（明治12）には、アメリカの医学者ダルトンの生理学のうち生殖機能の部分を翻訳し『生理提要附録』として刊行した。その序文に安宅は「田舎の医学生」と書いているが、当時の岡山が地方にありながら、こうした翻訳書が理解できる医学の先進地であったことがわかる。また、出版元の細謹社（舎）は地元で教科書を何冊も出版しており、後に岡山県が教育県といわれるようになった素地が偲ばれる。

しかし、当時の県令高崎五六の招聘でアメリカ人医師が来岡したことで大きな改革があり、その後は駆梅院長として梅毒対策と娼妓の健康維持、コレラが流行した時にはその対策に奔走した。

また、空船という雅号を持ち、漢詩を趣味とした。漢詩を通じて、県の官吏で漢詩人の多田松莊、教育者で書家の森谷金峯などと広い交流があった。安宅の漢詩は『空船詩草』にまとめられている。また、亡くなった時の追悼文には温厚篤実な人柄で、勤儉を旨とした生活であったという一文がある。

岡山の近代医学の黎明期に土台を作り、現在の岡山大学医学部発展の基礎を築いた一人である。

